
BLACK RAVEN CHRONICLE

BLACK RAVEN CHRONICLE

ブラックレイヴン クロニクル

CONTENTS

Character

Story

Special Story

Word

Character

キャラクター



リリア　Lilia

一子相伝の称号「BlackRaven（ブラックレイヴン）」を与えられた運命の退魔師。その潜在能力は計り知れず、その力に自身も気づいていない。おおらかな性格な反面、正義感が強い。少し優し過ぎる部分もあるが、その優しさが奇跡を起こす魅力を引き出している。上級退魔師のセシリーに気にかけてもらって嬉しい反面、まだ緊張してしまう所も。

好きなもの
美味しいごはん、鳥（特にカラス）、ルルナに選んでもらったお洋服、妹のルルナ（頭が良くて可愛いから）
苦手なもの
人混み、なぞなぞ等の難しいクイズ、パソコンなどの機械
趣味・特技
料理、スポーツ全般、古本屋巡り、読書



ルルナ　Luluna

人懐っこい性格で、よく子供扱いされるが実は色々なことを考えているしっかり者。明るく元気な所からムードメーカーとなって、とても人に好かれやすい。気が利いて頼もしい部分も多いが、自身の武器造りの才能に自信を持ちすぎているところがたまに傷。

好きなもの
物作り（DIY）、ショッピング、姉のリリア（見ていておもしろい）、まんまるに太った猫
苦手なもの
ドミノやジェンガ（興味のない事には集中力が続かない）、ヌルヌルした生物全般、
趣味・特技
機械関係全般、古い魔導書を探すこと、猫に逃げられずに近づけること



セシリー　Cecily

一見クールに見えるが実は情に厚く、後輩の面倒見が良い。完璧な退魔師を目指し日々努力を怠らない上級退魔師。訓練中は特に厳しい。潜在能力の高いリリアを気にかけているが、その自覚の薄いリリアにやきもきすることも。その能力を私が引き出してみせると、日々意気込んでいる。

好きなもの
魔導書、ミステリー推理小説、なぞなぞやジグソーパズル
いちご（日の当たらない所で頑張っている様が好き）
苦手なもの
直射日光、奇をてらった食べ物
趣味・特技
掃除、裁縫、瞑想、訓練

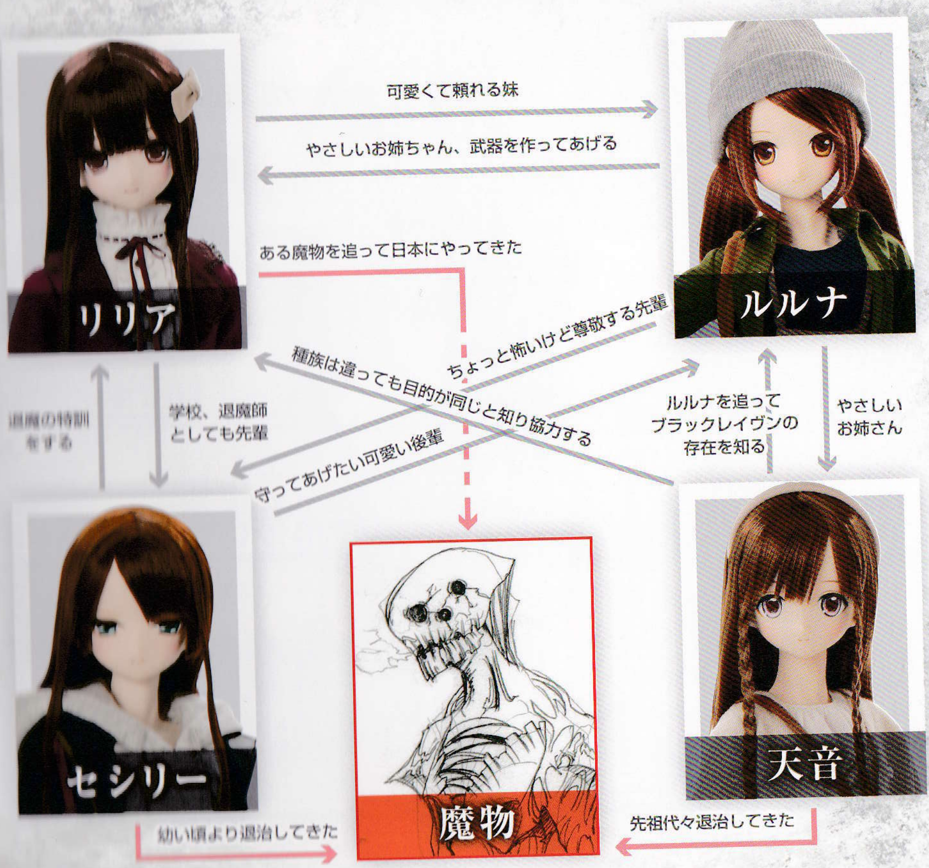


天音（あまね）　Amane

おっとりとしたマイペースな性格。物腰が柔らかく人に懐かれやすいが、引っ込み思案でうまく溶け込めない部分も。いつも楽しそうなリリア姉妹に憧れを抱いている。普段は、神社を護る巫女として精進しながら、人々の平和を祈り続けている。また訪れた人々のために境内で茶屋を営んでいる頑張り屋。

好きなもの
おいなりさん、和菓子（特にみたらし団子）、縁側でのひなたぼっこ
苦手なもの
たぬき、大きな音（声）、パソコンなどの機械
趣味・特技
三味線、日本舞踊、着物の着付け（髪結い）、料理、境内の掃除

キャラクター相関図



Story
物語



LILIA/BlackRaven
2010年12月発売

夜の闇にたたずむミステリアスな瞳の美しい少女リリア
そのまなざしの奥には不思議な力が秘められている。人々は囁きます。「彼女は古来より不吉な鳥の象徴とされてきたレイヴンの化身」だと。彼女がどこから来たのかそれは誰にもわかりません。彼女の正体とは……。



LILIA/BlackRaven Ⅱ

2011年5月発売

夜の闇にたたずむミステリアスな瞳の美しい少女リリア。その手に持つ短剣で街に潜む魔を祓うのです。
「私にしかできない家業(しごと)だから」
しかし、どれだけの魔を祓い終えても、彼女の心は晴れません。そんな彼女を見つめる妖しい人影……。彼女に新たな危機が迫りつつある。



Cecily/Fear of Darkness

2012年1月発売

ミステリアスな瞳を持つ少女リリア。彼女の家業は街に潜む魔を祓うこと。ある日彼女の前に突如現れた眼光鋭い少女「セシリー」。彼女は言う。
「リリア、あなたはわかっていない。この悪霊祓い(しごと)がどんなに危険であるかを……」
リリアと同じセリミディア学園の制服を着た彼女の正体は？その目的とは？



LILIA/Foreboding

2012年3月発売

「リリア」は街に潜む魔を祓う家業を継ぐもの「ブラックレイヴン」。普段はセリミディア学園に通い、ごく普通の女の子を演じている。リリアにとって平和な学園生活はとても嬉しく幸せを感じられる日々だった。そんなある日、どこか影のある上級生「セシリー」に呼び出されたリリアは魔を祓うことがどんなに危険であるかと、思わぬ忠告を受ける。セシリーは何故かリリアの家業を知っていた。そしてリリアと同じ宿命を背負う者であると告げた。

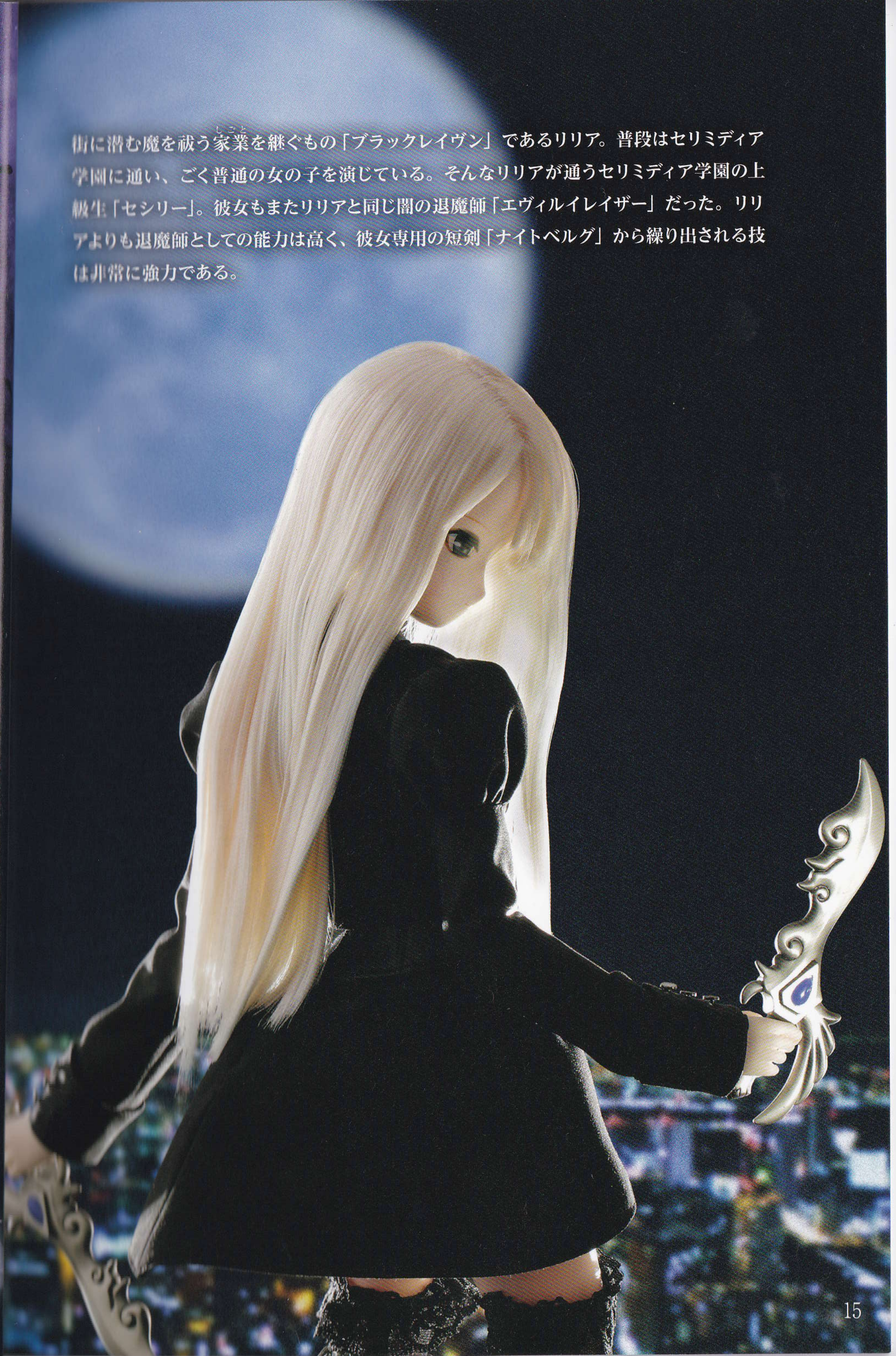


その時、セシリーはマントの裾から銀色に光る短剣を出し、リリアに向かって投げつけた。驚いたリリアは咄嗟に身構えたが短剣は僅かに逸れ、後方に潜んでいた魔物に当り、その禍々しい姿の魔物は悲鳴を上げながら消滅していった。リリアはセシリーに礼を言ったが彼女は冷たい口調でリリアが更に凶悪な魔物達に狙われていることを告げると闇の中に去って行ってしまった。何故、そのような凶悪な魔物に狙われているのか、セシリーの言葉に愕然とするリリア。魔物達との戦いは目前に迫っていた。



Cecily/Fear of Darkness Ⅱ

2012 年 5 月発売



街に潜む魔を祓う家業を継ぐもの「ブラックレイヴン」であるリリア。普段はセリミディア学園に通い、ごく普通の女の子を演じている。そんなリリアが通うセリミディア学園の上級生「セシリー」。彼女もまたリリアと同じ闇の退魔師「エヴィルイレイザー」だった。リリアよりも退魔師としての能力は高く、彼女専用の短剣「ナイトベルグ」から繰り出される技は非常に強力である。

Luluna/Preface

2012年10月発売





「お姉ちゃん、今夜は私が守るからね！」
新たな敵（魔物）の出現により苦境にたたされたリリアとセシリー。そのピンチに現れたのは退魔師の一人、リリアの妹「ルルナ」だった。「今時の魔物を退治するには科学の力も必要なのよ」彼女は銃のようなものを使い、魔物を追い払うことに成功した。

三日月の晩、その効力は倍になるというルルナの武器。科学と魔法を合わせたその力にリリア達は驚いたが大切な妹が魔物との戦いに参加することは心配でもあった。
「ルルナ、今回は助かったからお礼を言うけど……あまり危険なことはしないでね。」
「大丈夫、大丈夫！まかせておいてよ」
ルルナはそういって明るい笑顔を見せた。



LILIA/BlackRaven Ⅲ
～ The beginning of the end. 終わりの始まり～

2013 年 1 月発売



退魔師として戦う宿命を背負うリリア。しかし、その実力はまだ中級悪魔を祓うことで精一杯であった。そんなリリアを見かねたセシリーは彼女を連れ出し、未だ眠り続ける才能を目覚めさせる。

時を経て、二人はセシリーの予兆通り魔物の大量出現を感じとり、東京の街に降り立つ。舞い踊るように華麗に戦うリリアの両手には、闇に煌めく、新たなる武器『ＴＪＴクライラー』が握られている。彼女達の新たな戦いが幕を上げた。



Cecily/Fear of Darkness Ⅲ
～ The beginning of the end. 終末の予兆～

2013 年 2 月発売



赤い月が妖しく揺れる東京の夜。
夥しい数の魔物を前にリリア達は苦戦を強いられるがセシリーの「グレアベルグ」から放たれる閃光は空をも切り裂く勢いで魔物達を祓い続ける。そこに遅れて現れたルルナに祓い切れないほどの魔物達が一斉に襲い掛かってきた。

自らも四方を囲まれ身動きの取れないセシリーだが、その攻撃をうけることを厭わずルルナに襲い掛かる魔物へ「グレアベルグ」を放った。宙を舞う「グレアベルグ」は閃光と共に伝説の魔鳥『フレスベルグ』に姿を変え一瞬にして闇を祓う。しかし、その閃光が落ち着いた一瞬のスキを突き、生き残りの魔物がセシリーに襲いかかった。魔物と共にセシリーが闇に飲まれ消えて行く姿がルルナの瞳に映る。突然のことにリリア達は呆然と立ち尽くしていた。狼狽するルルナ。
セシリーは……。セシリーの行方は……。

Luluna/Moonlit Raven
～ The beginning of the end. 三日月の記憶～

2013 年 8 月発売

東京に突如大量に出現した魔物たちとの戦いでルルナをかばい、闇に飲まれて姿を消したセシリー。あれから数日。罪の意識を抱えるルルナは未だに見つからないセシリーのことを想い、焦燥感にかられていた。



三日月が輝くある夜、新たな武器の開発に成功したルルナはひとり静かに家を抜け出した。街中を飛び回りセシリーの痕跡を探したが魔物の気配すら感じ取ることができなかった。ルルナがあきらめかけたその時、突然この街では見覚えのない教会が霧の中から姿を現したのだった。

魔物の気配を感じたルルナは意を決して教会の中に足を踏み入れた。そして巨大な空間の中を進むルルナの足が止まった。魔物達の前を躊躇なく歩むセシリーの姿がその瞳に入り込んだのだ。何かを確信したルルナは悪霊を切り裂く大鎌「TJT ヴァルジネス」を振り上げて大挙する魔物達を凄まじい破壊力で一網打尽にし、セシリーを追った。しかし、魔物達の数は多く、セシリーまであと一歩というところでルルナは巨大な魔物に掴みあげられてしまった。

ルルナの心臓に狙いを定めた魔物達は一斉に鋭利な角で襲い掛かる。絶体絶命のその瞬間、魔物達の身体に次々に風穴が開き、やがて消滅した。弾道の先には、ルルナを心配して後をつけてきた姉、リリアの姿があった。ルルナ達の眼前にはこちらを見向きもしないセシリーがいたが負傷したルルナを抱え、リリアはとにかく建物から脱出した。



振り返るとその建物はビルの廃墟に姿を変えていた。夜が明けた空には、まだ白く霞んだ三日月が揺れている。その薄れ行く月明かりの先にはルルナ達を見つめる妖しい人影が伸びて行く。その影の正体とは……。

Amane/Vulpes Diva
～ The beginning of the end. 導きのうた～

2013 年 12 月発売

セシリーの思いもよらぬ行動に動揺するリリアとルルナを、そっと眺める人影。彼女の名は、天音。杜に住まい、古来から眼下の町や村を守り続ける掟を継ぐ者である――。彼女の瞳には、セシリーを信じる心に疑いを抱いてしまったリリアの姿が、ただ寂しく写り込んでいた……。天音は、静かに俯き……囁くように詠った。



――煌々と輝く宵の三日月――闇が深きを増す度に――
――その美しき姿は今宵の天に映え渡る――
――されど重なりし明鏡の映す対翼は――その月をも抱く――
――大いなる羽ばたきとなる――

ルルナの腕に黒い影のような痕を見つけると、リリアは天音の声が導くままに杜の中へと隠れ込んだ。赤い社の前で二人を待ち受けていた天音は、言葉を交わす間もなくルルナの手を引き、縁側に座らせた。天音はゆっくりと持っていた扇子をルルナの腕に当て、素早く開き、そして大きく扇いだ。風が体を通り過ぎるのを感じたルルナは腕の痕が消えている事に喜んだ。



お礼を言うリリアに微笑む天音は、二人の気配を感じた時から一部始終を見ていた事、すでにセシリーは闇に飲まれている事を躊躇うことなく伝えた。ルルナは視線を落としたが、リリアはルルナの手を握り天音を真っ直ぐ見つめた。軽く頷く天音は、セシリーは有能な退魔師である事、天音自らの手本とするべき存在である事を伝え、「影を祓う妖術」でセシリーを救い出す手助けをすると約束した。

セシリーの魂が影に取り込まれてから数日……。僅かに杜を照らしていたおぼろ月も消え、辺りには再び濃霧が立ちこめている。胸に宿した小さな光を頼りに、三人は新たな運命へと歩み出す。

Cecily/The Darkness soul.
～彷徨える魂～

2014 年 6 月発売

天音との出会いにより、セシリー奪還に僅かな希望を見出したリリアとルルナ。しかし、その頃セシリーは地下深くにかつて建造された廃墟を根城にし、今も尚暗闇に心を奪われていた。



長い地下通路を行くセシリーの動作からは感情の様なものが感じられず、ただ目的の場所へと機械的に動いているだけのようである。やがて煉瓦でできた広間へと辿り付くと、真紅の布が敷かれたソファーに腰をかけ、鋭利な刃の付いたグローブをそっと左手にはめた。

甲の先端から刃の突き出たそのグローブの名は、「エヴィレイスレイヴ」。体内の魔力を限界値以上まで増幅し、禍々しい斬撃を放つ闇の武器である。その瞬間、セシリーを中心に僅かに広間が揺れ始め、自ら装着した「エヴィレイスレイヴ」を抑え込む。揺れが鎮まるとセシリーは左手を支え、先ほどまでの雰囲気とは違う好奇心にも似たオーラを垣間見せるのであった。

夕刻を過ぎ、辺りが暗闇に覆われた頃。突如、セシリーは何か自分の知る感覚が近づいて来ている事を察知する。すると、記憶が頭の奥底から引き抜かれるような痛みを覚え、膝を付いてしまう。なんとかその痛みを振り払うと、反射的にこの感覚を与えた存在を倒さねばならないと捉え、ゆっくりと地上へと足を向けた。



地上へと続く錆びた扉を開けると、そこにはセシリーにとって異質に思える存在が既に到着していた。それはリリア、ルルナ、天音の3人である。自らの記憶にあるようで無い存在。記憶にある事が不自然な存在。しかし、「倒す」という事には何ら変わりはなかった。一瞬の隙にセシリーが「エヴィレイスレイヴ」を水平に振ると、その衝撃波で地面は抉られ砂埃が舞い、リリア達の視界は奪われた。体勢を整える間もなく、続け様に縦に伸びた衝撃波が砂埃を裂きながら襲い掛かる。これを何とかかわしたリリア達だったが、視界の許す隙間から見た先には既にセシリーの姿はなかった。魔力の気配を察した天音が素早く振り返ると、そこには周囲の瓦礫を浮かせ次の攻撃まで待つ彼女の姿があった。

闇に飲まれ、魂を奪われたセシリーは、以前とは比べ物にならない程圧倒的な「力」に満ち溢れている。微かに照らす月の明りの下、希望の光を紡ぐ壮絶な戦いが幕を上げた……。

Luluna/Shooting to The Abyss.
～彷徨える魂～

2015年1月発売

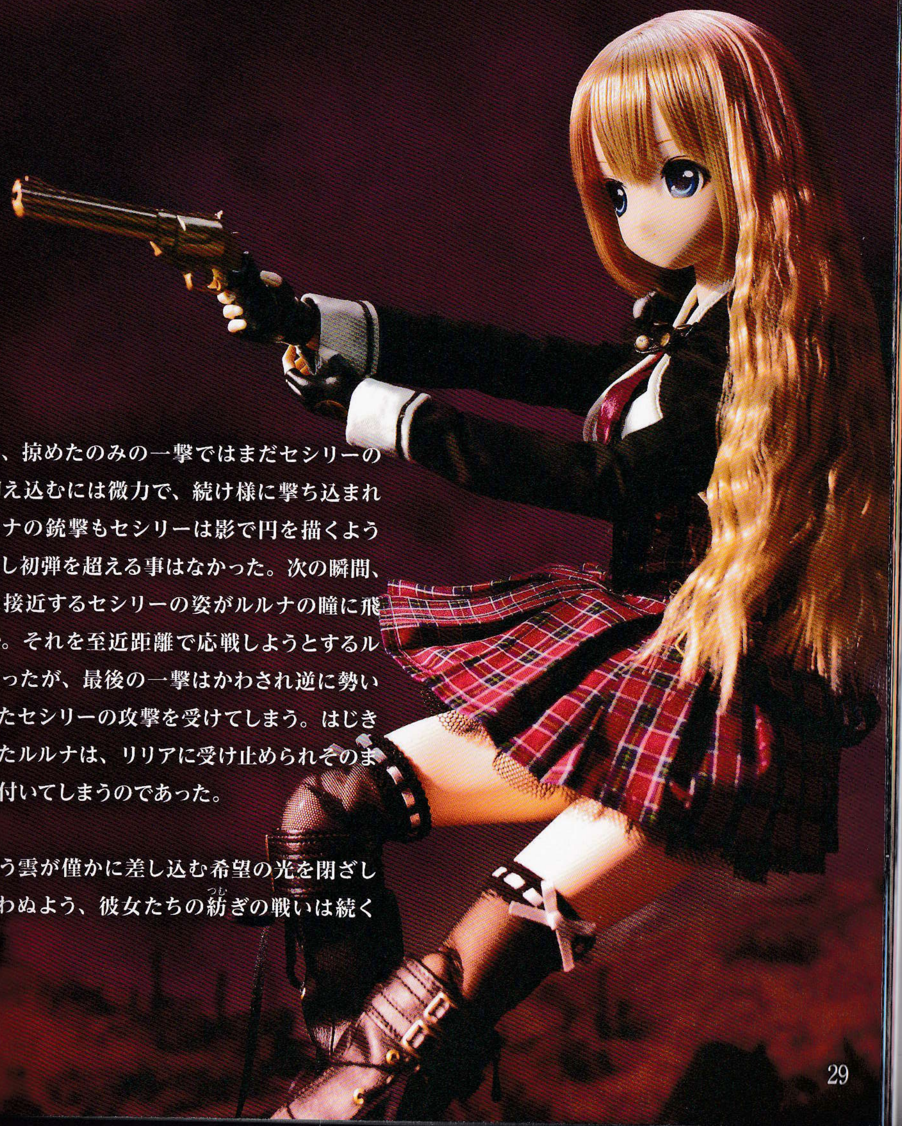
セシリー奪還に向け、焦燥感に駆られていたルルナであったが虚を突かれ魔物の攻撃により、腕に「黒い痕」を受けてしまう。命辛々隠れ込んだ杜で出会った天音に助けられ大事には至らなかったものの、自身の未熟さを再び痛感するのであった――。



とある日、ルルナは武器工房での家業を終え、制服姿で「退魔黒祓協会」（通称：ＥＰＡ）へと訪れていた。今回の家業は、以前姉のリリアの為に作り上げた銃「TJT クライラー」を元に他の退魔師でも扱えるように簡易化した「ＭＰクライラー」を製造する事であった。これまでも数々の武器をＥＰＡに納めてきたルルナだが、今回の銃は「ＴＪＴクライラー」本来の威力は下がるものの、魔力の装填スピードはむしろ向上し、より実践に適合した仕様になっている。ルルナはこうして一つ一つの役割を果たし、その手で救える未来を思う日々を過ごしていた。

突然、協会中に警報が鳴り響き辺りが赤いライトに照らされた。ルルナは、慌てて走り過ぎる人を呼び止め説明を求めると、ここからそう遠くないエリアで強大な魔力の振動をキャッチしたと言う。それを聞いたルルナは、急いで武器管理倉庫に向かい、自身が初めて完成させたリボルバー式の銃「イーヴィル　イグニション」を持ち出し、覚悟を決めた表情で協会を後にした。

荒廃した現場に到着し、リリアと天音に合流するが、言葉を交わす間もなく土煙の向こうに見慣れた影が姿を現した。それは、紛れもなくセシリーの姿であった。刹那、横一閃に鋭い衝撃が走る。散り散りにかわしたルルナ達は、連続する容赦のない攻撃に圧倒されながらも僅かな月明かりを頼りにセシリーの気配を探す。焦るリリアと天音だったが、ルルナは一人息を飲みながらも「イーヴィル　イグニション」を構えていた。魔力で操作された瓦礫が宙を舞い三人に襲い掛かりそうになったその時、一瞬の隙を見極めたルルナの一撃が爆音と共に放たれた。弾道はセシリーの肩を掠め、道筋に漂う闇は裂かれて消失していった。



しかし、掠めたのみの一撃ではまだセシリーの闇を抑え込むには微力で、続け様に撃ち込まれるルルナの銃撃もセシリーは影で円を描くようにかわし初弾を超える事はなかった。次の瞬間、急速に接近するセシリーの姿がルルナの瞳に飛び込む。それを至近距離で応戦しようとするルルナだったが、最後の一撃はかわされ逆に勢いを増したセシリーの攻撃を受けてしまう。はじき出されたルルナは、リリアに受け止められそのまま膝を付いてしまうのであった。

天を覆う雲が僅かに差し込む希望の光を閉ざしてしまわぬよう、彼女たちの紡ぎの戦いは続く……。

Lilia/BlackRaven V

The Stardust Nightmare. ～彷徨える魂～

2015 年 3 月発売



リリアは、セシリーから教えられた退魔師（エヴィルイレイザー）としての心得を思い出していた。
『――大切な物を奪われる悲しみを知り そして尚戦う覚悟を持たなければならない――』
その言葉は、セシリーが闇に飲み込まれる直前にリリアに告げた言葉であった。リリアは、「退魔黒祓協会（エヴィルイレイザーパージングアソシエーション）」（通称：EPA）にある退魔師が日々鍛錬を積み重ねる為の、地下実践場「退魔黒祓錬成所（エヴィルイレイザーパージングエチュード）」にいた。リリアがトレーニングを再開しようと立ち上がろうとしたその時、片側の眼に痛みとは違う何か重く熱い疼（うず）きを感じた。EPAの外に出ると、リリアはその瞳の中にセシリーの言葉を胸に刻んだ「七色の洞窟」が見えたように感じられ、導かれるように歩（あゆみ）を進めた。訪れた洞窟には輝く泉が揺らめき、その前には泉を守るように大剣「エクシードグラヴィティ」が突き刺さっていた。その大剣に手を添えると急速に魔力を奪い、刃の中央で魔力の炎を燃やし始めた。やがて衝動は治まりリリアはその大剣を軽く抱きかかえた。すると、リリアは以前感じた事のある魔力の出現を感じ取り、手にした大剣と共にセシリーの元へと向かった。

辿り着いた場所にはルルナと天音の姿があった。荒廃し他に人影もなく砂煙だけが風に煽られていた。強く風が吹き、辺りの砂煙が割れる。その狭間の向こうには、セシリーの姿が微かに見え隠れしていた。すると瞬間的に察した彼女たちは、散り散りに飛び去り、横一閃に轟音（ごうおん）を立てる衝撃波をかわした。続け様に繰り返される攻撃に、いつの間にかそれぞれの姿まで見失う。焦り始めたリリアだが、一度後方の岩場に下がり、体勢を立て直した。

すると、着地とほぼ同じタイミングだっただろうか、爆音と共に眩しい輝きが土煙を蹴散らせながらセシリーの肩を射抜いていた。しかし、その傷は浅くセシリーは軽快に次の弾道を避け、その銃撃を放ったルルナに接近し強烈な一撃を入れた。リリアは、弾き出されたルルナを受け止めて抱きかかえると、頬をそっと撫でて平らに割れた瓦礫に寄りかからせた。

今一度、リリアはセシリーの言葉を思い胸の辺りで強く拳を握りしめた。すると、辺りの大気はリリアを目掛けて走り出し、リリアが大剣を構えると一斉に逆向きへと散って行った。その衝撃を抜き去る速さで、リリアの大剣はセシリーの刃へとぶつかって行く。押し負けたセシリーは初めて苦悶（くもん）の表情を浮かべ、魔力を散らしていく。止まることなく高速且つ滑らかに放たれるリリアの剣激はやがて輝きを放ち、月光に照らされ純白に染まっていった。



切り崩されたセシリーの闇は散り、その存在そのものを維持できなくなっていった。しかし、リリアの爆発的な魔力の使用もその体に負担をかけずにはいられない。追い詰められたセシリーは、数歩下がるとマントをなびかせ辺りに散った魔力を再びマントに吸い寄せ始めた。今度こそセシリーを取り戻したい。その一心でリリアは、地に突き立てた剣を構え直すが、もはや力が入らない。そこへそっとリリアの震える手に、掌を重ねる天音。温かく優しい笑みを浮かべた天音は「影を祓う力」を宿す宝刀を鞘（さや）に納め、ゆっくりと抜刀の構えを取った……。

Amane/The fate of blaze
～彷徨える魂～

2015 年 4 月発売

木々の間をすり抜け風に舞い上げられた花びら達は、その身を翻すたびに朝日に照らされて煌めいている。天音は、そんな景色を眺めながら社の周囲を囲う大木の上で温かな平穏を感じ取っていた。そして、愛する者達を救えた先の明るい未来を見据えていた。しかし、その為には成すべき事がある……。全ての平穏を願う故の苦しみが天音の胸を襲う……。



天音は地上に降りると、社の裏手にあるけもの道へと足早に進んで行った。少しの時間歩くと、木々が日差しを遮り昼間だというのにほの暗い不思議な空間へと出る。そこには、辺りとは明らかに一線を画した大樹が存在し、天音はその大樹に向けてひざまずいて一礼するとその幹の奥に括られた一振りの刀を取り出した。その刀は、宝刀『小夜斬光影（さやきりみつかげ）』。この宝刀は物体化されない《モノ》を斬る事ができる退妖魔刀であり、天音一族の家宝の刀である。天音はその『小夜斬光影』を手に取ると小脇に持ち替え、仲間の元へ向けて再び歩み出した。

天音はリリア、ルルナ姉妹と合流し、目的であるセシリー救出に向かう。やがて砂嵐の様に舞い上がる土煙の先にセシリーの姿が見え始める。すると次の瞬間、セシリーの攻撃が襲いかかり、天音たちは散り散りに分かれてしまう。そして突如、土煙の向こうにルルナの銃が輝きを放ちセシリーの肩を掠める。しかし、すぐさまルルナはセシリーの反撃を受けてしまう。天音はそれを庇うようにセシリーに向けて神速の剣舞で攻めより、一度セシリーを弾き飛ばす。衝撃をグッと堪えたセシリーは、そのまま天音を睨み構えを取った。

抜刀術の構えから、慎重に間合いを取る天音。静けさが辺りを包み込み、一秒がとても長く感じられた。しかし刻を決めた天音は再び大地を蹴り、目にも止まらぬ速さで宝刀を抜き、そこに佇む空気諸共セシリーを斬り抜けた。その一撃の剣筋は、セシリーの刃に逸らされたものの、確実に魔力を切り裂き浄化させた。しかし、セシリー自身の魔力は未だ尽きる事無く、天音は体勢を崩し逆に背後からセシリーの攻撃を受けてしまい、衣服は裂け大きな傷を負ってしまう。その時、セシリーの一撃を受け負傷していたルルナが僅かに残った魔力でセシリーの気を引く為、援護射撃をする。続けて覚醒したリリアの剣激も輝きを放ち、セシリーの闇を激しく散らす。ところが、膨張したリリアの魔力を吸収したリリアの魔剣は制御ができなくなり、リリアはそのまま意識を奪われてしまう。



両眼が黄金色に染まったリリアは、無心でセシリーを叩きつける様に斬りつけた。このままリリアも魔に飲み込まれてしまうのかと思われたその時、天音は宝刀『小夜斬光影』に向けて詠唱をし輝きに満ちた刃を天に掲げる。するとリリアの闇は鎮まり、リリアはその場に座り込んだ。そして、すぐさま天音は負傷した傷に耐えながらも身を投げ出し、大気をすり抜けるように宝刀を滑らせ、天高くセシリーを確実に斬り上げた。すると突如セシリーから爆発的に魔力が吹き出し、黒々とした煙の様な魔の渦が天に上り……、やがて消えていった。

疲れきって両膝を付いて座り込んだ天音の前には、穏やかな表情を浮かべ肩を寄せ合って眠るリリアとセシリーの姿があった。その向こう側では、ルルナが喜びと疲労の両方を表現するかのように泣き笑いながら両手両足をめいっぱい伸ばし寝転がっている。そんな優しい光景に、天音も自然と優しい笑顔を取り戻していた。やがて空は、夜空から暁の空へと変わり、暖かな日差しが彼女たちを包み込んだ。一瞬の様で長く、苦しい時間は遂に終わりを迎えた。また各地に広がっていた魔物の出現も一旦落ち着きを取り戻し、世界は平穏な時間を過ごしていく。

闇にたたずみ、人知れず魔物と対峙し続ける少女たちがいる――
この世に「魔」が存在する限り、彼女たちの家業は……終わることなく続いていく――

Cecily/The Edge of echoes.
～追憶の少女～

2016年4月発売



照りつける日差しが、肌寒い風の冷たさを緩和してくれる、そんなとある日。一人の少女が賑わう街中で人混みをすり抜け、ただ黙々と歩みを進めていた。彼女は日々魔物と対峙し世の平穏を守る家業「退魔師（エヴィルイレイザー）」の一人、セシリーである。

颯爽と歩みを進めていくセシリーは、賑わう街中で聞こえてくる店員の呼び込み声や街頭モニターで流れる最新情報など気にも留めず遠くを見つめて考えごとに耽（ふけ）っていた。思い起こされるのは、魔物との戦いで同じ退魔師の仲間ルルナを庇い自身の体を乗っ取られた出来事。また、上級退魔師のセシリーにとってその不徳は許される物ではなかった。しかし、それと共に魔物に支配された時、セシリーは薄れ行く記憶の中で憎悪にも似た凄まじい力が体内に満ち溢れる感覚を感じていた。そして、その禍々しい何かは今も尚、心のどこかで感じることができるのであった。
メインストリートを過ぎ人の数もまばらになった頃、セシリーは裏路地の方へと入っていった。



そこはお世辞にも明るく賑やかな場所とは言い難い雰囲気をかもし出している。すると突然、彼女の背後に人影が現れ、そっとセシリーの首に手を伸ばす。瞬時に振り向いたセシリーは、慌てた様子もなく至って冷静に相手を睨み付けた。その相手こそセシリーがわざわざ会いにきた者。魔力の研究に人生を捧げる男。通称「ドック(Doc)」である。イタズラ好きで、どこかネジの飛んだような彼は、退魔黒祓協会から離れ、裏の世界で好き勝手研究を続けている。

セシリーは、自身の体内に残る「魔力」の影響と活用、その二点の研究を彼に依頼しているのであった。ドックは、ヘラヘラと笑いながらまどろっこしい専門用語を並べ、わざとらしくタラタラと説明を始めた。しかし、それを全く相手にしようとしないセシリーにがっかりし、肩を落としながら本題へと入った。

セシリーの体内には、間違いなく「魔障（ましょう）」が残されている。それは、魔に犯された者に残る物で放っておくと再び闇に堕ちてしまう可能性を秘めていると言う。また、魔障を抑え込む手段は、自身の魔力で抑え込む以外に方法はないと続けた。つまりセシリーの求める答えは、たった一つの方法に委ねられた。

世界を蝕（むしば）む魔物にも自身を犯す魔障にも劣らないより強大な力を身に付け、そしていつしかこの体の中に宿る「魔」を己の力に変えてみせる。セシリーは、自らの誇りに誓いを立て、この薄暗い裏路地を去っていった。



Luluna/The Precious distance
～月械の少女～

2016年6月発売



小鳥のさえずりが聞こえてくる爽やかな早朝。ルルナは一人、学校へと登校していた。すれ違う友人達と笑顔で挨拶を交わしながらも、どこか少し落ち込んだ様子のルルナ。やがて正門を抜け、教室に入り、自分の席に座りため息をつく。ふと窓の外の空を見上げると、そこにはこれ以上にない平和な景色が広がっていた。「ぼー」っとしたまま時は経ち、気がつくともう昼休みになってしまっていた。クラスでは普段から明るく、どちらかと言えば騒がしい生徒のルルナ。だからこそ、親しい友人たちはすぐに彼女の様子に気がつき、積極的に声をかけてきた。
「ルルナちゃん、今日はなんだか元気ないねぇ？」
「どーしたのさっ？！ほら、お昼だよ！ご飯♪ご飯♪」
しかし、彼女たちが他愛も無い日常の話しをすればするほど、笑顔で振舞うルルナの心は締め付けられていくように感じられた。

今日は、そのまま放課後を迎えてしまった。明るく振舞いきれなかったルルナは、悪いことをしてしまったと悔やみながら、放課後の部活動に汗を流す友人を横目に帰路をたどった。

しかし、今日は「退魔黒祓協会（たいまこくばつきょうかい）」に納める為の退魔武器を開発しなければならない。帰宅して落ち着く間もなくルルナは服を着替え、リュックを背負い、協会内にある武器工房へと急いだ。工房への長い廊下を抜けて、扉を開けるとそこには様々な薬品や、魔法石、難しそうな魔法書が並んでいる。それらを棚からテンポ良く両手に抱えていくと、作業台に固定された試作品の「剣」の前に立ち、早速改修作業にとりかかる。

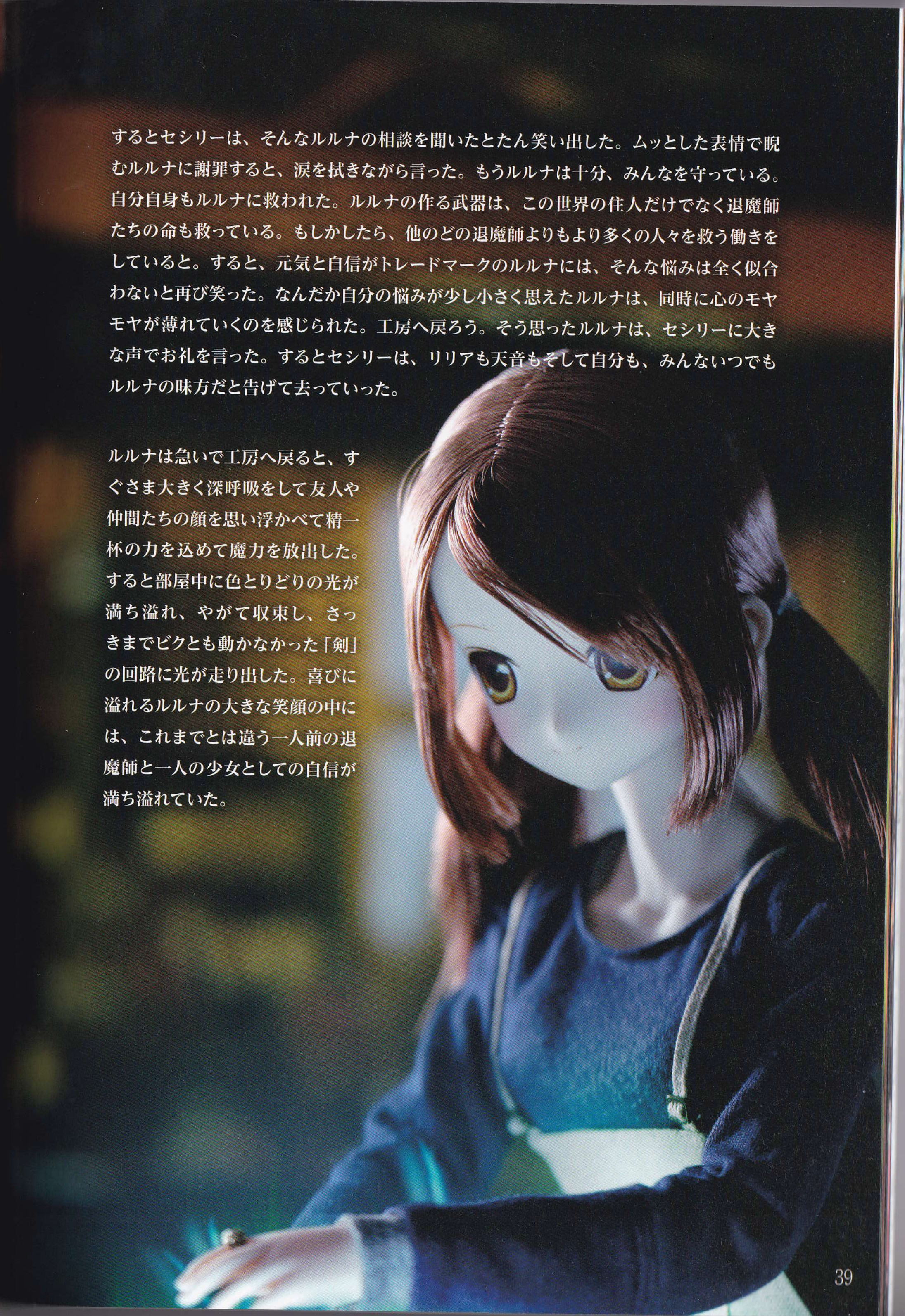


いつものように魔力の通り道となる回路に、ルルナ自身の魔力を直接流し込み動作確認をする。そこから、全体に張り巡らされた回路の状態を検知し、仕上げの作業へと入るのである。しかし、その「剣」はまるで反応を示さない。不思議に思ったルルナは、慌てて完成している他の武器を作業台に固定し魔力を流し込む。やはり反応は無い。どの装置も決して故障などしてはいなかった。ルルナ自身の魔力が発動しないのである。

愕然としたルルナは、取り乱しながら工房を出て、協会の外まで走り抜けていく。もう戦えないの……。もう武器を作れないの……。自問自答しながら涙をいっぱいに溜めたルルナは、近くの公園のベンチに座り込んだ。あんなに平和そうだった青い空は、夜の闇に覆われ、涙で激しく揺れて見えた。ゆっくりとうつむいたルルナは、胸いっぱいに広がる不安から逃れるように静かに長いため息をついた。

すると目の前で誰かの足音が止まるのを感じた。顔を上げると、そこには照れくさそうに目を逸らすセシリーが立っていた。協会から走り去るルルナの姿を確認したセシリーが後を追ってきたのである。ルルナの隣に腰をかけたセシリーは事情を尋ねた。

ルルナは素直に魔力が使えなくなってしまったことを伝える。少しの沈黙の後セシリーは腕を組み、心に迷いや不安がないかと尋ねた。ルルナは直ぐに気がついた。すると、ずっと心に溜め込んでいた不満を吐き出した。親しい友人たちと自分とでは、住む世界が違うこと。自分がそばにいると危険な目に会わせてしまうこと。でも、そんなみんなと仲良くしていたい、近くで守っていきたいこと。全てを伝えた。



するとセシリーは、そんなルルナの相談を聞いたとたん笑い出した。ムッとした表情で睨むルルナに謝罪すると、涙を拭きながら言った。もうルルナは十分、みんなを守っている。自分自身もルルナに救われた。ルルナの作る武器は、この世界の住人だけでなく退魔師たちの命も救っている。もしかしたら、他のどの退魔師よりもより多くの人々を救う働きをしていると。すると、元気と自信がトレードマークのルルナには、そんな悩みは全く似合わないと再び笑った。なんだか自分の悩みが少し小さく思えたルルナは、同時に心のモヤモヤが薄れていくのを感じられた。工房へ戻ろう。そう思ったルルナは、セシリーに大きな声でお礼を言った。するとセシリーは、リリアも天音もそして自分も、みんないつでもルルナの味方だと告げて去っていった。

ルルナは急いで工房へ戻ると、すぐさま大きく深呼吸をして友人や仲間たちの顔を思い浮かべて精一杯の力を込めて魔力を放出した。すると部屋中に色とりどりの光が満ち溢れ、やがて収束し、さっきまでビクとも動かなかった「剣」の回路に光が走り出した。喜びに溢れるルルナの大きな笑顔の中には、これまでとは違う一人前の退魔師と一人の少女としての自信が満ち溢れていた。



Amane/The Precious Ring.
～少女の憧憬～

2016年8月発売



煌びやかな青空の広がる朝方。あまねは、自身の住まう山の麓にある小さな川辺にいた。そこは、近所の子供たちもよく遊びに来る自然の美しい場所で、少し開けた景観から人と待ち合わせるにはもってこいの場所でもあった。しばらくして、川の流れに浮かぶキラキラした模様を静かに眺めていたあまねに、
「……わっ！」
と突然声がかかった。驚いたあまねは、体を硬直させると静かに振り返った。そこにはイタズラな笑みを浮かべるルルナと困ったように微笑むリリアの姿があった。普段、魔物との戦いに身を投じる彼女たちは息抜きとして
「あまねに街のことをいろいろ教えてあげる」
という名目の下、一緒に遊びに出かけるようになっていた。

その行事も今日が第2回目の開催。あまねが身につけている服も、初めて出かけた時にリリアとルルナが「絶対に似合う！」と豪語して購入したお気に入りの服。早速、街に向かって歩いて行くとリリアが今回のテーマを嬉しそうに発表した。そのテーマは、「あまねの洋服に似合う街並みを散策すること」。可愛らしい街並みに憧れていたあまねは、目をキラキラさせて喜んだ。



3人が向かうのは、7区というエリアを少し入った先にあるまるで異国のようなオシャレな街。アンティークな雑貨屋から、高級そうな洋品店、お菓子の様に可愛らしいカフェ。目が回るくらい賑やかなお店が立ち並ぶ街並みに、あまねはおとぎの世界に入り込んだ少女のように喜んでいた。しばらく歩き続けていた3人は、あまねの提案で「ニューオープン」と看板が出されているオシャレなカフェで休憩をとることにした。

3人は、店に入り席に着くと最初から決めていたかのようにお揃いでカフェモカを注文した。届いたカフェモカを一口飲むと、「ハァー」と同時に息をつく。そこからはおしゃべりに花が咲き、身の上話をしたり、リリアがルルナの失敗談をあかしたりと互いの話しに笑い合った。やがて、ルルナが退魔武器の話しを始めた。最近の魔法石は質が良いとか悪いとか……。意外なことに、2人とも興味津々に聞いてくれたので、少し声のボリュームが大きくなっていた。すると突然、店のマスターらしき強面の男が「おい」とふてぶてしく声をかけてきた。あまねもリリアも緊張で顔が強張っていた。話しを切られたルルナは、「何よ?!」といった表情で睨みつける。やがてマスターは、ルルナの側に立ち小さな声で何か囁いている。するとルルナは急に席を立ちマスターの後に続いて店の奥に入っていく。あまねが、どうしたの?とかけた声も届かず、ルルナは奥に入って行ってしまった。緊張と焦りで、声が上ずりながらも慌てて店の奥に駆け込む2人。すると、そこには鉄製の壁で出来た部屋が広がり、壁中に立派な退魔武器が掛けられている。なんとこのお洒落なカフェは、同時に退魔黒祓協会（通称：ＥＰＡ）公認の退魔師限定会員制武器ショップでもあったのである。元協会の武器職人であったマスターは、3人の活躍を知っており、ルルナの大きなお喋り声から「あの退魔師達」であると思ったのであった。



先に入ったルルナはというと、朝方に見せたあまねのキラキラした目を越える眼差しで、武器を眺め続けていた。その後もなかなか帰ろうとしないルルナに、あまねもリリアも数時間付き合わされたのであった……。あまねは、2人と別れた後ヘトヘトになりながらも家路を辿り、お気に入りの場所に少しだけ寄り道をした。山の上から見える景色は美しく夕日色に染まり、浮かび上がった稜線はまさに絶景であった。
「またみんなで遊びに行きたいな……」
そんな風に思いながら空を見上げるあまね。すると、今日一日の楽しかった出来事を思い出してクスッと笑い、やがて大きく背伸びをして心地よい風を全身で浴びた。

そうだ、今度はわたしがみんなをここに案内してあげよう。そう心に決めたあまねは、まだ見ぬ未来にまた心躍らせるのであった。

Lilia/The traditional grimoire.
～少女の綴る物語～

2016年9月発売

光の差し込まない暗い戦場。いつどこから魔物に攻撃されるのか、本当は魔物に取り囲まれているのではないか。そんな不安に胸を押しつぶされるような緊張と恐怖に、ただただ身をゆだねるしか術がない。しかし、リリアは知っていた。これから間もなく希望が訪れる事を。すると暗闇の中で唯一ふわりと光を放った黒い羽が舞い落ちてくる。リリアは必死にその羽に向かって手を伸ばすが、伸ばした手の風圧で羽は宙を自由に舞いながら逃げていく。意を決したリリアが思い切って身を乗り出した瞬間、バタンッと全身に衝撃を感じた。気づけばそこは、自分の部屋のベッドの下であった。最近よく見る夢の中だったようである。

眠い目をこすり、しばらくの間ペタリと床に座り込んだまま、リリアはこんな夢を何度も見る理由を考えていたが、すぐに止めた。理由は明白であった。戦いの果てに「魔障(ましょう)」を受けたセシリーを心配する気持ちが引き起こしている悪夢であった。自分の心がこんなに弱いなんて、セシリーに顔向けできない。そう思い直すと、リリアは何か思い立ったように退魔黒祓協会へと向かった。





協会のエントランスは広く吹き抜けになっていて、一見美しいアンティーク調の建物に見えるが、構造が普通ではない。この協会は防衛の目的で通常とは別次元にある為、広大な空間に異常に大きな建造物が立っていることになる。つまり、その大きさ故に協会の全体像を把握しきれている者は1人もいないと言われるくらい複雑な構造なのである。昔、同僚のオカルト好きの退魔師に「この協会は生きている」と聞かされたことがあった。

その気味の悪さから、一部の退魔師の間では良からぬオバケ話が流れるくらいだ。しかしながら、今回はよく知っている場所に用事がある為、リリアは迷うことなく歩を進めた。正面階段を上がり、3階D区画の右から3つ目の扉の部屋へと向かう。しかし、その扉には「キケン KEEP OUT」と書かれたテープが×印のように貼ってあり、入室を禁じられてしまっている。ならばこちらにと、代わりの部屋に向かったリリアだが、そこは退魔武器の暴走でもあったのか、部屋自体が真っ黒にコゲていた。愕然としたリリアは、これは一体どうなっているのかと誰かに尋ねたい気分だが、生憎今日は休日で人が少なく、誰にも頼れそうに無かった。

仕方なく闇雲(やみくも)に類似する部屋を探して歩き回るリリア。するといつの間にか、あまり訪れたことのないフロアに辿り着いていた。恐る恐る辺りを見渡す。すると立ち止まった場所から2つ先の部屋の扉が、少しだけ開いていた。「この協会は生きている」そんな噂話が思い起こされ恐怖を感じるリリアだったが、逃げるわけには行かない。今日わざわざここへ来たのはセシリーの魔障の正体を突き止める為である。
「ここに導かれているのなら」
と、リリアは思い切って中へと入って行った。扉の向こうには、窓もない暗い部屋が待っていた。ゆっくりと勝手に閉まっていくドア。動揺しないよう気丈に耐えるリリア。ドアが閉まると、そこは光の差し込まない完全な暗闇であった。すると束の間、オレンジ色の灯りが付き、初めて部屋の様子が伺えた。そこは木目調の本棚に明らかに古い書物が並べられた書庫のようであった。ここなら、何かヒントが掴めるかもしれない。リリアの中で不安は、希望へと変わっていた。



早速、端から順に魔障についての手がかりを探り始めるリリア。あれも違う、これも違う。そんな作業を繰り返して行くと、いつの間にか時は経ち夕刻を迎えていた。やがて疲れ果て、本を手に取る速度も落ちてきた。しかし、手を止めるわけにはいかない。自分に多くのことを教えてくれた先輩の為に。一緒に多くの窮地と楽しい時間を過ごしてきた大切な仲間の為に。なにか少しでも恩返しがしたい。そう強く願えば願うほどリリアの脳裏に様々な思い出が浮かびあがり、やがて一筋の涙を流していた。頬を伝う涙は、スッと頬を離れ地面に落ちていく。すると床に涙が触れた瞬間、部屋中に魔力の気配が溢れ、涙の落下点を中心に光の輪が広がっていった。そして、その波紋の光に呼応するかのように、一冊の本がリリアの背後で輝きを放っていた。

急いでその本のある棚に駆け寄り、リリアは静かに手に取った。すると、その本の背表紙には「BLACKRAVEN」の文字が刻印されていたのである。この本は、「Black Raven」の称号を受け継いできた先祖達の残してくれた魔術書。色々な思いをはせながら中を覗き込むと魔障に関する記述のみが記されていた。この魔術書には魔法がかけられており、称号を引き継いだ者が望んだ答えのみ示される作りのようである。そして、そこに記されていたのは、一度魔障に犯された者は、再び闇に堕ちる可能性が大いにあるという事。またそれを抑え込むには退魔師自身の魔力で抑え込む必要があると綴られている。ただし、その者の魔力が魔障の力に劣った時、魔の浸食が進行すると続けられていた。落胆するリリアであったが、まだ最後の1ページに小さく走り書きがされた箇所がある。
「魔王の印を石に込め、反転世界でそれを喰らえ」
リリアには、この意味がほんの少しだけ分かった気がした。本を閉じ棚に戻すとリリアは静かに入り口の前に向かった。そして部屋の方へと向き直すと、深く長いお辞儀をしたのであった。



部屋を出てエントランスに下りると、そこには先ほどまでいなかった人達が賑やかに仕事をしている。驚いたリリアはさっきまでいた部屋を振り返ると、もはやどの部屋であったか思い出すことも出来なかった。なんとなくそれを子供の悪戯のように感じたリリアは、少しだけ微笑むと、掴んだヒントを胸にまた力強く歩み出したのであった。

Special Story

期間限定商品



Lilia/Night on Halloween

2013年9月発売

今宵はリリアが魔物舞踏会（ハロウィンパーティー）へあなたをご招待☆
「Trick or Treat !」そんなイタズラっ子な悪霊だってリリアにとってはお手のもの！魔法使いの力を借りた「Happy Halloween !」の合言葉で街の平和を守っちゃう♪



天音／夢味茶屋（ゆめみちゃや）

2015年11月発売

今回の天音は、緑深い木々に囲まれた自身の神社にある「夢味茶屋」で、店主として皆様のお越しをお待ちしています。" 安らぎと癒しの空間 " と評判をいただいている「夢味茶屋」は、巫女として平和を守る天音にとっても束の間の休息と平穏をもたらす憩いの場。年末年始に向けて賑わう天音の「夢味茶屋」に、あなたもぜひ足を運んでみませんか？



リリア／夢味茶屋（ゆめみちゃや）

2016年11月発売

BlackRaven 祭Ⅱ開催を記念して初版リリアが和装メイド姿で再登場！
ブラックレイヴンシリーズ「リリア」が華やかな着物ドレスに身を包んだ和装メイドの装いで登場！愛らしく、どこか懐かしいリリアが、天音の神社にある『夢味茶屋』でお待ちしております♪

1/12Lilia BlackRaven
～ The battle of the night. 終わりの始まり～

2016 年 6 月発売

とある夕刻。未だ未熟ではあるが一人の退魔師（エヴィルイレイザー）「リリア」が彼女の通う学校「セリミディア学園」から下校している。いつも通り友人と他愛もないおしゃべりをしている様に見える彼女だが、今朝から薄っすらと校舎の中に魔物の気配を感じていた。普通、完全な夜が訪れない限り、魔物が動き出すことはない。リリアは気づかれない程度に急ぎ足で、友人と別れた。

自宅に戻り妹のルルナと顔を合わせると、同じ退魔師であるルルナも同じ事を口にした。すると退魔師の武器製造も兼任しているルルナから、魔物退治の仕事と一緒に新たな武器のテストも任されてしまう。こんな時に悠長な……と戸惑うリリアだが、これも立派な仕事だと思い、一本の短剣と一丁の銃を受け取り、再び学園へと戻った。

完全に暗くなった校舎は、さすがにリリアでも恐怖を感じる。時々鳴る壁や床の軋む音に怯えながらも、使命感を燃やすことで何とか乗り切ることができた。すると、上の階の廊下から窓が振動するほどの大きなうめき声が聞こえた。その声をきっかけに、リリアは先ほどまでの様子とは打って変わって鋭い眼光で窓の外に飛び出した。外壁の僅かな段差を正確に蹴り、華麗に宙を舞っていく。リリアの瞳には、確かに上層階の廊下にいる魔物が捉えられている。瞬時に身を翻したリリアを魔物が捕捉した時には既に、一発の銃弾が魔物の額を貫いた。



※ヘッド原型：八海（83℃）※アイペイント：思い当たる ※武装原型製作：前嶋隆一（ピースメーカー）※ボディ原型製作：(有) 澤田工房

黒い塵のように消えていく魔物だが、リリアに戦いを止める様子はなく再び外壁を蹴り上げ短剣で防御の構えを取った。すると校庭の方から物凄いスピードで魔物が攻撃を仕掛けてきた。衝撃に耐えるリリアだが、やがて弾かれて屋上へと着地する。魔物はそのままの勢いで、街の方へと逃げていく。このままでは…、と急いで魔物を追いかけるリリア。追撃するリリアに苛立った様子の魔物は、空高く大きく跳ね上がり頭上から攻撃を仕掛けてきた。リリアはそれを再び短剣でいなすと同時にひらりと一回転し、そのまま魔物を蹴り落とした。ビルの屋上に不時着した魔物に数発の銃弾を浴びせると再び塵のようになって消えていった。



魔物からの一撃で、肩に軽い傷を負ってしまったリリアだったがまた今日もなんとかこの街を守ることができた。いつの間にかいつもの穏やかな表情に戻るリリア。早く帰ってルルナに武器の感想を聞かせてあげなきゃ。そう思いながら、やっと家路に向かうリリアであった。

Word
用語解説

退魔師「エヴィルイレイザー」

街に潜む魔を祓うもの。またそれを家業として継ぐものを「ブラックレイヴン」と呼ぶ。

戦闘用退魔服「タージェイター」

退魔師が戦闘時に着用する服の総称。天音が纏う「鬼菱暈（おにびしがさ）」も該当する。

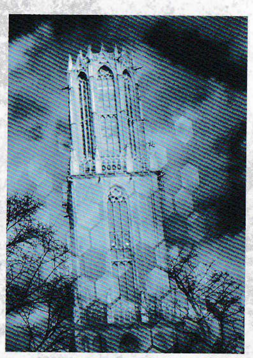
セリミディア学園

リリア、ルルナ、セシリーの通う退魔師とは関係ない普通の学園。リリア達は普段、退魔師としての力を隠し、普通の学生として通っている。

夢味茶屋

天音が店主の「安らぎと癒しの空間」と評判の茶屋。天音のいる杜にあり、深い木々に囲まれ天音にとっても休息の場所。リリアがスタッフとして働くことも。

たいまこくばつきょうかい
退魔黒祓協会

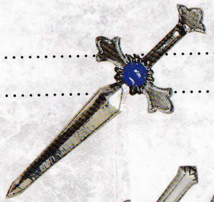


正式名称は“Evil eraser purging association”通称「EPA」。退魔師を統括・支援する影の支援組織。その存在は所属する退魔師でもすべてを把握しきれない程謎に包まれているが、建物は視認できないよう結界が張られており、魔物の侵入を許さない構造になっている。ルルナが退魔武器を開発するための武器工房等も建物内に存在する。協会自体が生きている、と一部では噂されている。

たいまこくばつれんせいじょ
退魔黒祓錬成所

正式名称は“Evil eraser purging etude”。退魔黒祓協会の地下にある古より退魔師が錬磨をする為の実践場である。内壁には、無数の魔法陣のような紋様が刻まれており内側からの衝撃を封じ込める仕様になっている。

リリアの短剣



登場シリーズ：LILIA/BlackRavenⅡ

リリアが持つ短剣。クロスネックレスから短剣へと姿を変えることができる。

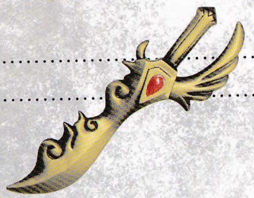
ナイトベルグ



登場シリーズ：Cecily/Fear of DarknessⅡ

セシリーが使う二刀一対の武器。伝説の魔鳥“フレスベルグ”から作り出された魔道具に代々伝わる退魔石を組み合わせた短剣。大気中の魔力を吸収する事で魔物のみを絶つことができる。ただし魔を吸収しない場合は紙すら切れないただの鉄の塊。

グレアベルグ



登場シリーズ：Cecily/Fear of Darkness Ⅲ

二刀流剣“ナイトベルグ”を融合させた“グレアベルグ”。更なる進化を遂げた、至高の輝きを放つ。強力な閃光を放つことで魔を祓う。

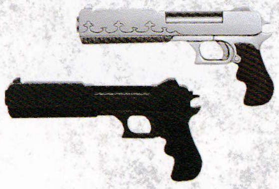
ヴェルゼイルシューター&エヴィケットダガー



登場シリーズ：1/12Lilia BlackRaven

魔物の魔力を元に作られた強力な銃と、細かな魔力の粒子を帯びた超振動ダガー。どちらもルルナが開発した武器。実践でのテストはリリアが担当した。

TJT クライラー



登場シリーズ：LILIA/BlackRavenⅢ

リリアの妹「ルルナ」が作った科学と魔法を融合させた銃。リリアが扱う。黒い銃を「クレイア」、銀色の銃を「キャスティー」とルルナが名前をつけている。手の平から直接銃に氣を送り込み、その氣を魔法で圧縮して放つ。体力の消耗も激しいが、高い威力を持つ。また、純銀製の弾を撃つ事もできる。

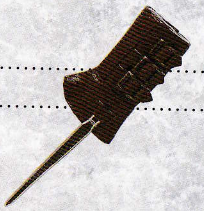
イーヴィルイグニション



登場シリーズ：Luluna/Shooting to The Abyss.

チャージした魔力を圧縮し、より密度の高い高魔力体を発するリボルバー式の銃。ただし、使用後の反動は凄まじく、身体に大きなダメージを残してしまう。ルルナが初めて完成させたリボルバー式の銃。

エヴィレイスレイヴ



登場シリーズ：Cecily/The Darkness soul.

セシリーが使用していた甲の先端から刃の突き出た、刃と一体型のグローブ。体内の魔力を限界値以上まで増幅し、禍々しい斬撃を放つ闇の武器。誰によって作られた物なのかは不明。

天音の扇子



登場シリーズ：Amane/Vulpes Diva

天音が使う扇子。癒しの力を風に乗せて影を祓うことができる。

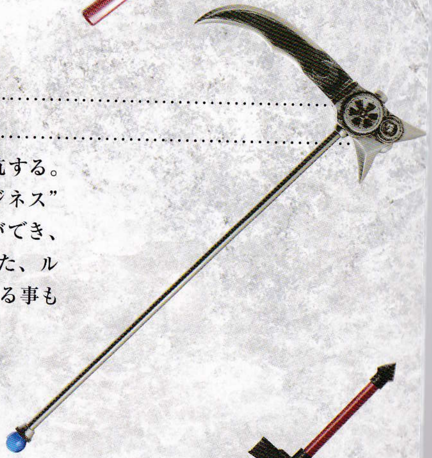
小夜斬光影（さやきりみつかげ）



登場シリーズ：Amane/The fate of blaze

天音の住まう杜の奥深くで伝承と共に守り続けて来た宝刀。退妖魔刀「小夜斬光影」は魔力等の通常物体化されない《モノ》を斬る事の出来る神速の刀剣。天音の詠唱に呼応しその力を増す事が出来る。

TJTヴァルジネス



登場シリーズ：Luluna/Moonlit Raven

未だ退魔師として未熟なルルナは武器を生成し魔に対抗する。ルルナ自身の為に新たに作り上げた武器“TJTヴァルジネス”は自らの魔力を増幅しバルジ（半球体）に集中させる事ができ、ルーンブースターの推進力から、強力な一撃を放つ。また、ルルナの意志に呼応し「大鎌」から「長刀」へと姿を変える事もできる。

エクシードグラヴィティ



登場シリーズ：Lilia/BlackRaven V

古来から存在する魔剣。使用者は魔剣自身が選んだ者のみに限られ、契約の際に使用者の魔力は魔剣のエネルギー源として吸い取られてしまう。しかし、その「魔力の共有」から大剣は凄まじい威力を維持しながらも使用者の身体の一部の様に軽々と扱う事ができる。リリアが七色の洞窟内で見つける。

BLACK RAVEN CHRONICLE

ブラックレイヴン クロニクル

この小冊子は 2016 年 12 月 16 日より開催の「Black Raven 祭Ⅱ」にて配布したものになります。

※画像はサンプルです。実際の商品とは異なる場合があります。(撮影用にヘアスタイリングしております)

※掲載している商品はすべて発売済みの商品です。

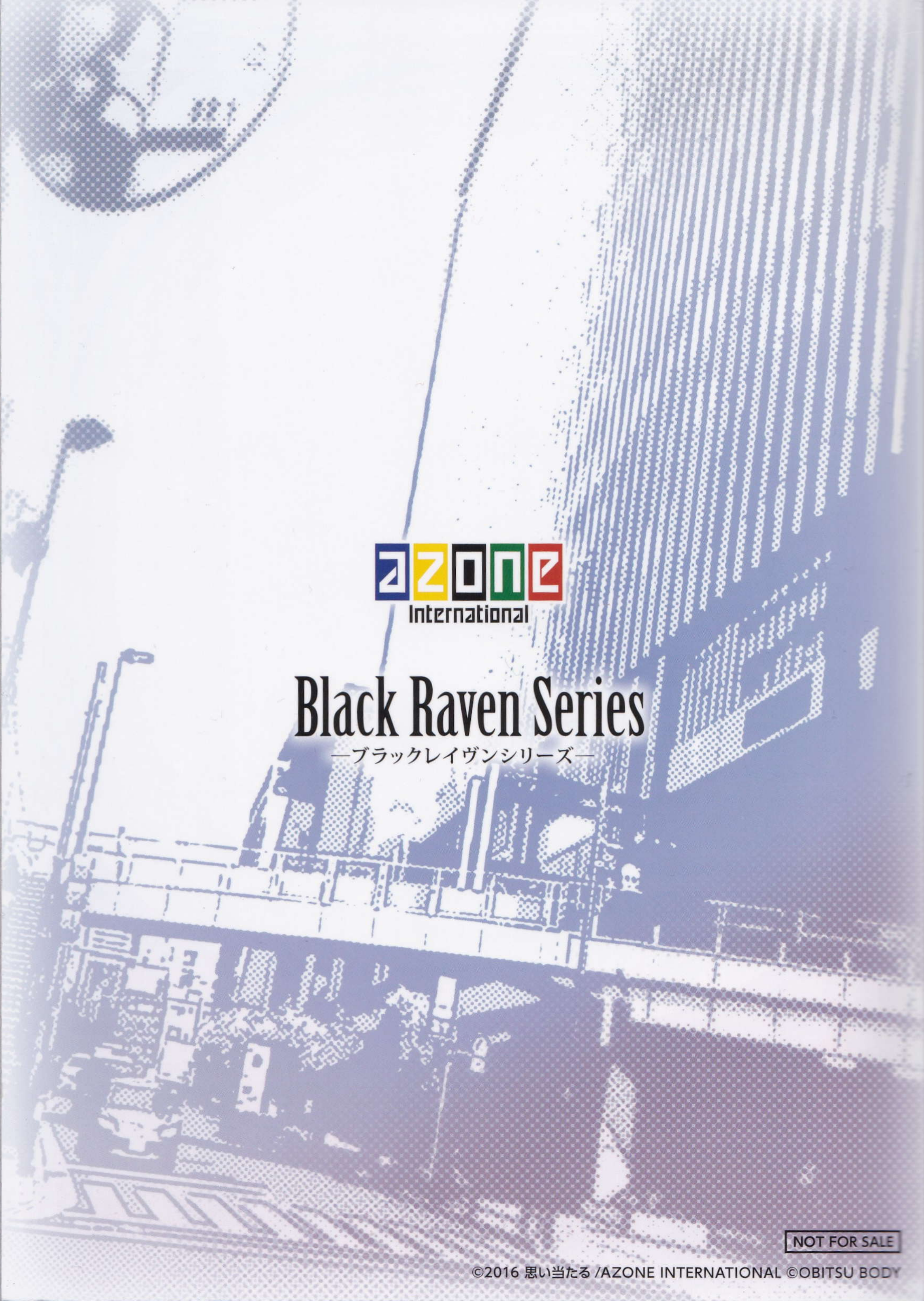
※この物語はフィクションです。登場する全ての団体、地名、企業名、個人名等は全て架空のものであり、実在する名称とは一切関係ありません。

P14-15	背景素材著者：ava verino... is trying to keep up..
P20	背景素材著者：Fringe Focus
P11	背景素材著者：~Brenda-Starr~
P10	背景素材著者：tarotastic　Daniel Peger
P12	背景素材著者：Skunkworks Photographic/Wolfgang Staudt/Luke Peterson Photography's photostream/Patrick Landy
P18	背景素材著者：Paulo Barcellos Jr.

azone International

株式会社アゾンインターナショナル

〒252-0815　神奈川県藤沢市石川4-1-7



azone International

Black Raven Series

—ブラックレイヴンシリーズ—

NOT FOR SALE